



【教育目標】 自ら学び正しく判断して行動する国際性豊かな児童生徒の育成を
～～～ 一人一人が輝く子どもの姿を求めて ～～～

☆8月の目標

- ☆学習をがんばろう
- ☆みんなと なかよくしよう
- ☆笑顔で あいさつしよう

☆配布物のお知らせ

- 1 学校便り
- ☆保護者の会から
 - ・落とし物について
 - ・ベル、安全パト当番表

☆今後の行事計画

- ・8月 5日 2学期始業日
- ・9月23日 運動会
-
- ※今日から2学期がスタートしました。季節は、夏から秋、冬と変わっていきますが、体調に気を付けて、子どもたちが安全で安心に過ごせる週一度の補習校に皆さんで協力していきましょう。

「森へ」を読んで
六年一組

辻本 凜香

私がいちばん心に残った場面は、「すでに一生を終えたサケがたくさん流れてきています。森の自然に栄養を与えてゆくからなのです。」という所です。なぜかという、私はこの本を読んで、サケが産卵した後死んでしまうと初めて知ったからです。サケは産卵に体力を使うので命がけでした。いちばん心に残った写真は、69ページの写真です。この写真、筆者の言っているように、年若い木が長い年月をかけてゆっくると大木に成長しているの、根が足の様に生えた不思議な姿になった木です。その写真が心に残った理由は、木全体にコケがでるほど何年もかかった大きな木だからです。

「森へ」を読んで思った事は、長い年月をかけてできたアラスカの森は、時間がゆっくり動いているように感じました。一度自分の目で見て、森を感じてみたいなと思いました。

「森へ」を読んで
六年一組

内田 羽為斗

僕は「森へ」を読んで感じた事は、まず一つは表現力です。とくに一番好きなところは、ミルク色の世界という所が好きです。きりをミルク色にしたとえる、これは想像が苦手な人から見たらいいなとえだと思えます。少なくとも想像が苦手な僕から見たら分かりやすい例なので、心に残りました。

次に、僕が心に残った写真は、森の写真です。僕は自然が好きなので、この写真が心に残りました。とくに「様々な地衣類が枝から着物の様に垂れ下がった木々は、そのまま歩きだしそうな気配でした」という所は、想像するとつい笑ってしまいます。

最後に「森へ」を読んで感じた事は、表現力のすごさです。色々な場面面で面白いたとえを使っていますので、そこに作者のすごさを感じました。

「森へ」を読んで
六年一組

吉村 泉希

「森へ」を読んで一番心に残った場面は、「倒木の道にはところどころクマがあちこちにいます。」の所です。どうしてかと言うと、いろんな動物の事が書いてあるからです。最初はアカリスがトウヒの実を食べているところを書き、他の動物たちもこのクマの道を利用して、作者がよく伝わりやす。その次に、作者が川に入り、川の事やサケの事を書いていきます。サケが産卵のための大群に気が付いてサケをつかむ事をずぶぬれになりながら何度もくり返した事がおもしろいと思いました。最後にはクマの親子がじーっと作者の事を見ている事に気が付き、川から出たクマがあちこちにいてサケを食べている所でした。動物が自然で生きていく所が心に残りました。私が一番心に残った写真は、子グマが木の上で寝ている写真です。子グマの写真が一番心に残った理由は、かわいいからです。わたしは動物が大好きで、特に赤ちゃんや子供の動物が大好きです。子グマを見た時、すぐにこの写真が好きになり、心に残りました。自然に囲まれ木の上だから、大丈夫かなーと思うことが多いです。私が「森へ」を読んで感じた事は、自然は不思議な事や他のいろんな事を学ぶことが出来ると思いました。ザトウクジラは広い海原にいるはずなのに、作者がいた場所、南アラスカからカナダにかけて広がる原生林の近くの入り江にいて、作者もおどろいていました。作者が森の中へ入って、いろんな事を学ぶことが出来ました。「森へ」を読んで考えたことは、森の中に行く時、服装を明るい色にしない事です。色が明るいとおそわれるかもしれないからです。もし私が森の中へ行くのなら、一人ではなくて友達と行くと思います。一人だとさみしくてこわいからです。

「森へ」を読んで

六年一組 村重 太陽

ぼくが「森へ」という物語を読んで一番心に残った所は、「昔、一本のトウヒの木が年老いてたおれてしまいました。その根の間に空いていた穴、それは、栄養をあたえつくして消えた倒木のあとだったのです。」なぜその場面が心に残っているかと言うと、なぜ人間の様に立っている木があるのだろうか、という場面の答えが分かったからです。年老いてたおれてしまった木でも、森に自分の栄養をあげているという所にとっても感動しました。

ぼくの心に残っている写真は、きのこの写真です。なぜなら、最初に写真を見た時、これは何だろうと思いました。文章を読むと、それがきのこだと分かり、とてもびっくりしました。そして、もっとおどろいた所は、きのこがくまのふんから生えていた所です。ぼくは写真がともきれいなので、部屋にかざれるくらいだと思ったのに、きのこがくまのふんから生えていると知って、とても残念な気持ちになりました。くまのふんから生えていると知らなければよかったです。また、筆者の言っていた、厳しい自然ではわずかな栄養分もむだにならないのです、という言い分もなっとくしたからです。

ぼくはこの「森へ」という物語を読んで、森に対しての考えが少し変わりました。ぼくは今まで、森は争い合って、負けたものは食べられるなどの残こくなイメージがありました。しかし、この森の魚はくまに自分の身をささげたり、たおれた木がほかの木に自分の栄養をあげたりなどの助け合いがあった事が分かりました。しかも、それで森が成り立っている事にも気づきました。本当におもしろかったし、色々な事を学びました。この物語を沢山の人にも読んでもらいたいです。

「森へ」を読んで

六年一組 グリグレイティス 晶子

私が「森へ」を読んで心に残った場面は二つあります。一つは、「最後の氷河期が終わり、地表が現れ、気の遠くなるような時間をかけて森ができたのがたつたのです。木々やコケ、そして岩や倒木までが、たがいにかみながら助け合い、森全体が一つの生き物のよう呼吸しているようにでした。」というところです。この場面が心に残った理由は、表現やたとえがわかりやすいからです。「気の遠くなるような時間をかけて」ところは、「すごく長い時間をかけて」「何万年もかけて」よりも想像しやすいと思います。「一つの生き物のように呼吸しているようにした」は、森を生き物にたとえていています。森の生物が生きたために助け合っているのがわかります。

もう一つの心に残った場面は、最後の方の「じつと見つめ耳をすませば、森はさまざまな物語を聞かせてくれるようでした。」です。この場面が心に残った理由も、たとえです。森の声や生き物の動きを、森の「さまざまな物語」にたとえているのです。ただ「森の音が聞こえてきます」だけでは想像しにくいのですが、「物語をきかせてくれるようでした」でまとめた方が、シーンが頭にうかびます。

いちばん心に残った写真は、子グマが木の上でねている写真です。この写真が心に残っている理由は、なぜかこれを見るとぼわーんと笑みを浮かべてしまうような気持ちになるからです。あんな落ちそうで危ない体勢ですやすやねている姿がかわいいです。子グマ自体もかわいいです。

この作品を読んで、作者はすごいなあと思います。カメラ、カメラとリュックでアラスカまで行って、原生林の中に入り、クマなどのさまざまな動物と出会うことができるのは、それほどいいなと思います。物によるけれど、気になることをネットでもただ調べるだけでなく、実際にやってみることも大切だと思います。

☆四年二組 夏の俳句

つばめの子電気の上にするを作り

宇野太陽

夏まつり屋台を回るうれしさよ

降矢夏希

ひまわりがゆれるゆれるよ風にのり

松本藍里

ほたるがり夜にキラキラきれいだな

野田唯花

夏の海泳いで遊ばたのしいよ

日置珂允

楽しそう金魚が泳ぐスイスイと

出口銀河

梅雨明けて初めて泳ぐ夏の海

マタインアディソン

夏の空入道雲が泳いでる

相澤優心

夏の日にプールに行ってスプラッシュ

鈴木一貴

せん風機とてもすずしい気持ちいい

清水大輝

つばめの子ふん水見てにじを見た

井田陽太

友達と思い出作るすいかわり

緒方心菜

まっ暗の手の中光るホタルがり

丹野祐希

